東アジアの視野からとらえた日本の茶と茶文化に関する学際的研究

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学 公開日: 2019-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 戸部, 健 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/00026473

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K01869

研究課題名(和文) 東アジアの視野からとらえた日本の茶と茶文化に関する学際的研究

研究課題名(英文) The Interdisciplinary Research for Japanese Tea Industry and Culture from an East Asian Viewpoint

研究代表者

戸部 健 (TOBE, KEN)

静岡大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：20515407

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：近世・近代における日本の茶業・茶文化を東アジアとの関わりに重点を置いて検討した。とりわけ近世末期の静岡・熊本における茶生産の進展と輸出との関係、近代における日露茶貿易と中国との関係、近代に日本茶・中国茶取引を行ったイギリス系グローバル企業の動向などを解明した。その過程で、日本国内や海外(台湾・アメリカ・イギリス)の所蔵機関などを訪問し、日本とアジア(特に中国)の茶業・茶文化関連史資料を収集・発掘した。

研究成果の概要(英文)：In this research project, we examined the Japanese tea industry and culture in early modern and modern period from an East Asian viewpoint. Especially we focused on (1) the development of tea production and its export in early modern Shizuoka and Kumamoto, (2) the relationship between Japan-Russia tea trade and China in 20th century, (3) the activity of a UK based global enterprise which traded Japanese and Chinese tea in 20th century. In this process, we also had collected many historical materials relating to Japanese and Chinese tea at several libraries in Japan, Taiwan, United States and United Kingdom.

研究分野：中国近現代史

キーワード：茶 茶業 茶文化 日本 中国 東アジア ロシア イギリス

1. 研究開始当初の背景

本研究は、戦前日本における重要な輸出品であり、戦後においても山間部などでの主要な農産物として今なお盛んに栽培され続ける茶をテーマに、学問横断的な研究を行なったものである。

従来、日本における茶栽培や茶文化をめぐるは、農学・経済学・民俗学・歴史学・文学といった個別の分野において研究がおこなわれ、一定の蓄積を成してきた。とはいえ、そうした研究が相互に結びつくことは、本研究を開始する以前の段階で必ずしも多くなかった。例えば、東アジアの茶業・茶文化研究においては、「日本の茶業」、「中国の茶文化」などのように、特定の国や地域を中心とした考察がしばしば見られた。ただ、それぞれの時代において、東アジア、特に日本の茶業・茶文化が世界からどのように見られていたのか、という問いについては、ユーカーズ『オール・アバウト・ティー』や角山栄『茶の世界史』など先行する業績があるものの、十分に答えられているとは言い難かった。また、日本やアジアの茶がどのように生産・再製・流通し、最終的にどのように認識・消費されたか、その総体的な姿についても時代ごとの変化に合せて解明されなければならないと感じられた。まさに国境やディシプリンを超えた研究が求められていたのである。

2. 研究の目的

それゆえ我々は本研究に取りかかったのだが、その際最終的な目標として次のようなものを想定した。(1) 学問分野や地域の壁を乗り越えることではじめて見えてくる日本の茶と茶文化の独特な姿について明らかにすること。(2) そうした日本の茶や茶文化のあり方を世界の長期的な流れのなかで客観的に捉え、より発展させていくための視座を構築すること。(3) その成果を、輸出の不振や高齢化などの問題で悩む日本の茶業界および茶業を主な収入源として暮らす人々が住む地域社会へ還元すること。

なお、日本を代表する茶どころであり、それに関係する多くの人的・物的資源を有する静岡を拠点とすることは、こうした研究をする上で極めて有利であったと考えている。

3. 研究の方法

本研究を開始する前の段階において、研究代表者の戸部(東洋史学を専攻)は、同様の考えを持つ他分野の若手研究者ら(日本史学・文化人類学を専攻)とともに2014年5月に研究グループを組織し、近世～現代日本(特に静岡)と東アジア(特に中国)の茶・茶文化をめぐる分野横断的な研究に取り組んでいた。その時点ですでに初歩的な文献・フィールド調査にも着手しており、その成果をいくつか発表していた。ただ、そうしたなかで各人が認識するようになったのは、研究に必要な資源についての情報が十分に整理

されていないこと、そして重要であるにもかかわらず従来の研究で取り上げられてこなかった史資料(フィールド調査で得られる口述資料を含む)が依然として多く存するということであった。

そこで本研究では、日本の茶・茶文化に関連する先行研究や史資料について整理するとともに、新出史料の発掘も行なうことにした。そして、その基盤のもとで、各メンバーの自ら得意とするディシプリンとその方法(文献研究・フィールドワーク)に則って初歩的な研究に取り組んだ。その成果を総合することで、これまでの研究では見えてこなかった、近現代東アジア全体に占める日本の茶・茶文化の独自の位置を明らかにしようとした。

4. 研究成果

(1) 日本とアジア(特に中国)の茶・茶文化関連史資料の収集・発掘・整理

研究開始以前の段階で、日本や台湾の茶に関する戦前戦後の基本史料を纏めたものとして、寺本益英編『日本茶業史資料集成』24冊(文生書院、2003年～)などがあった。また、中国茶に関するものでは布目潮風編著『中国茶書全集』2巻(汲古書院、1988年)、陳湛綺責任編輯『民国茶文献史料彙編』5巻(全国図書館文献縮微複製中心、2009年)などがすでに刊行されていた。さらに、我々が研究を開始した後に、中国茶に関する大型史料集として、方健彙編校證『中国茶書全集校証』7冊(中州古籍出版社、2015年)、福建省図書館編『閩茶文献叢刊』8冊(国家図書館出版社、2016年)、許嘉璐編『中国茶文献集成』50冊(文物出版社、2016年)などが相次いで出版された。まずはそれらを購入することから始めたが、高額のため入手できないものもあった。そうした史料集については、国内の所蔵機関を訪問して、内容を確認した。

このように、近年日本やアジアの茶、特に中国茶関係の史料へのアクセスが容易になったが、他方でそれら史料集に収録されていない史料も依然として膨大なことが研究を通して明らかになってきた。なかでも日本語や英語の史料については、さらなる探索が必要ということを確認した。そこで、国内外の以下のような所蔵機関で史料調査を行った。

国内：日本茶業中央会茶業文庫、国立国会図書館、アジア経済研究所図書館、静岡大学図書館、静岡県立図書館、フェルケール博物館、野菜茶業研究所図書館(金谷)、岐阜大学図書館、京都府立図書館、京都大学経済学部図書館

国外：米国議会図書館、中央研究院近代史研究所図書館(台湾)、大英図書館、ロンドン市文書館

このほか、個人宅にて日本近世の地方(じかた)文書の調査も行っているが、詳しくは本欄(2)を参照のこと。

各館では著作権の範囲内で必要に応じて

コピー・スキャン・写真撮影を行った。また、各機関が所蔵する史料を横断検索できるように、『中国茶業文献聯合目録』の作成に着手した。日本茶業文献ではなく中国茶業文献から始めたのは、すでに茶業組合中央会議所編『支那茶業文献目録』(1942年)という目録が存在しており、それをベースに情報を適宜追加していくのが近道だと考えたからである。将来的には日本茶業文献に関する目録も作成したいと考えているが、量が膨大すぎるため本研究プロジェクト期間中では取りかかることができなかつた。なお、『中国茶業文献聯合目録』については、条件が整い次第暫定版をウェブ上に公開する予定である。上で述べたように近年茶業・茶文化関係の史料が次々に発見されており、しばらくその状況が続くことが予想されるため、紙版を出版するよりも、ウェブ上で随時更新していったほうがよいと考えている。

(2) 各時代・地域に関する研究の成果

研究協力者の岡村は、戦前日本最大の輸出用茶葉の生産地であった静岡の茶生産・流通に関する史料を精力的に収集し、考察した。具体的には、フェルケール博物館が所蔵する、明治10年代~20年代にかけて静岡茶の海外輸出を担った「静隆社」の関係文書、大正期に静岡県茶業監督員として静岡県の茶の品質管理を厳しく指導した島田市大代の河村家の文書などを調査した。これら明治期以降の動向に加え、近世静岡の茶生産について考察を深め、最終報告書の論文「茶生産者の流通・消費認識と製茶法の変化 横浜開港以前の駿河国を事例に」では、江戸後期静岡における茶生産者の流通・消費認識のありようを文政茶一件(1824〔文政七〕年)という事件での動きを通して明らかにした。そこでは、1738(元文三)年に永谷宗円が完成させた宇治製法という新しい製茶法の普及についても検討し、幕末以前の駿河国ではそれがまだ一般的でなかつたことを実証している。幕領である駿河国には、地域を挙げて宇治製法の導入を推し進めるような主体が存在しなかつたことが背景にあったとする。

その宇治製法を早くから導入していたのが熊本藩であった。日本近世史を専攻する今村(研究分担者)は、近世日本の茶生産の実態を明らかにするため、地方文書、特に1842(天保十三)年熊本藩の農業生産力調査書(「諸御郡惣産物調帳」個人蔵)を分析した。その結果、以下の三点について数量的に明らかにした。熊本藩農村部の非農業生産のうち、茶の生産高は第8位に位置し、非農業生産の主要品目であったこと。地形的にみて、茶生産が盛んに行われたのは山間部が多いこと。住民1人あたりの耕地面積が小さい、あるいは土地生産性が低い地域でも、茶生産は盛んに行われた傾向があること。そして、最終報告書の論文「幕末・明治前期における茶生産の地域的展開 熊本藩(県)域を事例

に」では、1840年代と70年代の熊本藩(県)における茶生産量を比較し、30年余りの間に生産量が大幅に増えていることを明らかにした。熊本茶は長崎開港直後から海外に輸出されていたが、その背景に輸出向けの製茶法の習得を行う篤農家の存在や、茶産業を積極的に推進する熊本藩の姿勢があったとする。

その後、日本茶の海外輸出は静岡茶を中心に隆盛を極めるが、これまでの研究ではアメリカへの輸出状況に関する研究が圧倒的に多かつた。戦前において日本茶が最も多く輸出されたのがアメリカだったからというのが主な理由だが、とはいえ、その他の輸出先との関係についても一層研究を進める必要がある。アジア経済史を専攻する吉田(研究分担者)は、雑誌『茶業界』の記事や、『支那茶業の経済的考察』(1940年)、『支那茶の世界的地位と其の将来』(1942年)などをはじめとする日本語史料や中国語史料を検討することで、近代日本の対ロシア茶輸出と中国の茶業との関係について分析を進めた。その結果、統計上は比較的順調に進んだようにみえる1920~30年代の日ソ間の茶貿易が、中国の茶貿易の動向にも影響を受けて、紆余曲折に満ちていたとの見通しを得るに至り、それを最終報告書の論文「戦間期日ソ茶貿易史研究の深化にむけて」に纏めている。日ソ間の茶貿易を見る上で実は中国の存在が重要であることを史料に基づいて提起している点が特徴的である。

ところで、日本茶がソ連に輸出されたきっかけは、中国を拠点とするイギリス系茶貿易商社であるハリソンズ・キング・アンド・アーウィン社が日本とソ連の茶業界を仲介したことだった。このハリソンズ・キング・アンド・アーウィン社(以下、HK&I社)は、同時期にアメリカ最大の日本茶輸入業者であったアーウィン・ハリソンズ・アンド・ホイットニー社(以下、IH&W社)とともに、イギリスの総合商社であるハリソンズ・アンド・クロスフィールド社のグループ企業であった。中国近代史を専攻する戸部(研究代表者)は、ロンドン市文書館が所蔵する文書資料を用いて1920~40年代におけるHK&I社とIH&W社の動向について検討した。最終報告書の論文「近代中国におけるイギリス系茶貿易商社の動向解明に向けて ロンドン市文書館所蔵ハリソンズ・キング・アンド・アーウィン社関係文書について」では、世界史的視野から中国茶や日本茶を捉える上での、ハリソンズ・キング社の文書の可能性について論じるとともに、同社の財務・取引状況、危機対応などのありようの一端を明らかにした。他方、「戦前期北米の東アジア茶専門貿易業者の経営状況 ロンドン市文書館所蔵アーウィン商会関係資料について」ではIH&W社の財務状況と、北米での事業展開の状況について検討した。まだまだ不明な点が多いが、これまで知られていなかった、イギリス系グローバル企業による茶取引での日本や中国

の茶の位置づけを検討する足がかりを得ることができたと考えている。

以上は主に茶の生産・流通に関わるものであったが、茶の消費やそれに関わる文化についても解明されるべきである。文化人類学を専攻する長沼(研究分担者)は、20世紀初頭から現代にかけて広東省珠江デルタの各県・市で発行された地方志などの文献資料を収集し、茶文化やそれにまつわる伝説の地域差や、時代ごとの変遷について分析した。途中一年の産休期間があったこともあり、フィールドワークを十分に行うことができなかつたが、今後の研究を進める上で下地を形成できたと考えている。他方、茶文化に関しては、戸部(研究代表者)も衛生の角度から考察を行った。例えば、学会報告「小学校教科書の記述にみる中華民国初期の健康観」では、近代中国における健康観と茶の関係について、同時代の日本との比較もしている。

(3) 今後の展望

茶は、生産 出荷 輸送 再製 移出・輸出 販売 消費という一連の流れのなかで、実に多くの人やモノ、そして地域と関わりを持つ。また、よく知られているように茶は、各国や各地域において独特の消費文化を作り出している。そうした消費地での文化や嗜好の変化は、他方で茶の生産や販売のあり方に大きな影響を与え、それがさらに生産地の社会・自然環境のありようや、物流の仕組みなどにも変化を与えた。こうした茶をめぐる動きの総体を明らかにするには、多様な視点やディシプリンが欠かせない。

そのような視点から我々は研究を推進し、(2)で見たように、「茶をめぐる動きの総体」の一端を明らかにできたと考えている。ただ、十分に解明されていない部分は依然として多い。幸いなことに、上述したように関連史資料へのアクセスは以前に比べ容易になっている。また、3年間のプロジェクトの過程で我々の研究に関心を持って下さる研究者との新たな出会いもあった。今後もより多くの研究者との協力の下で、日本およびアジアの茶業・茶文化に関する学問横断的な研究を深めていきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 13件)

戸部健、近代中国における英国系茶貿易商社の動向解明に向けて ロンドン市文書館所蔵ハリソンズ・キング・アンド・アーウィン社関係文書について、アジア研究(静岡大学)、査読無、別冊7、2018、pp. 27-39

今村直樹、幕末・明治前期における茶生産の地域的展開 熊本藩(県)域を事例に、アジア研究(静岡大学) 査読無、別冊7、2018、

pp. 5-17

吉田建一郎、戦間期日ソ茶貿易史研究の深化にむけて、アジア研究(静岡大学) 査読無、別冊7、2018、pp. 19-26

岡村龍男、茶生産者の流通・消費認識と製茶法の変化 横浜開港以前の駿府を事例に、アジア研究(静岡大学) 査読無、別冊7、2018、pp. (1)-(22)

戸部健、戦前期北米の東アジア茶専門貿易業者の経営状況 ロンドン市文書館所蔵アーウィン商会関係資料について、アジア研究(静岡大学) 査読無、12、2017、pp. 17-24 https://shizuoka.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=8229&file_id=31&file_no=1

戸部健、北米における近代中国関係資料調査報告、中国都市芸能研究、査読無、15、2017、pp. 55-69 <https://wagang.econ.hc.keio.ac.jp/~chengan/index.php?『都市芸研』第十五輯/北米における近代中国関係資料調査報告>

今村直樹、近世後期日本の「地方税」を考える 熊本藩領の会所官銭と会所並村出米銭を事例に、熊本近代史研究会会報、査読無、548、2017、pp. 2-10

戸部健、アジアおよび静岡の茶と茶文化に関する学問横断的研究、アジア研究(静岡大学) 査読無、11、2016、p.77 https://shizuoka.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=8238&file_id=31&file_no=1

今村直樹、近世駿府・駿河の領主制や地域社会を考えるために、静岡県地域史研究、査読無、6、2016、pp. 1-16

岡村龍男、近世駿府の支配構造と地域社会、静岡県地域史研究、査読無、6、2016、pp. 33-43

岡村龍男、フェルケール博物館所蔵『静隆社関係文書』、静岡県近代史研究、査読無、41、2016、pp. 26-60

戸部健、YMCA アーカイヴズ(ミネソタ大学)所蔵中国 YMCA 関係史料について 天津関係史料を中心に、歴史評論、査読有、84(1-4)、2015、pp. 251-264

吉田建一郎、興亜院華北連絡部『北支那綿羊調査報告』について、史学、査読有、85(1-3)、2015、pp. 245-259

[学会発表](計 15件)

戸部健、清末民初の華北社会と YMCA 学校

教育への影響力の拡大過程、2017年度三田史学会大会東洋史部会、2017

戸部健、北米における近代中国関係史料調査報告、中国都市芸能研究会 2016年度冬季大会、2017

今村直樹、近世後期日本の身分間移動と村、「郷と村の国際比較史」研究会、2017

今村直樹、近世後期熊本藩領における「身上り」運動と村、2017年度熊本史学会春季研究発表大会、2017

今村直樹、近世日本の「地方税」を考える熊本藩領の会所官銭と会所並村出米銭を事例に、熊本近代史研究会 2017年7月例会、2017

吉田建一郎、中日戦争時期日本対寒羊和寿陽羊的調査活動、近代中国北方経済与社会転型学術研討会、2017

岡村龍男、江戸時代の静岡茶を見直す 徳川將軍家の御用茶から横浜貿易まで、日本茶インストラクター協会静岡支部総会記念講演、2017

岡村龍男、清水湊から清水港へ 明治前半の変容に迫る、フェルケール博物館友の会総会、2017

岡村龍男、江戸時代の安倍本山茶、安倍奥の歴史講座、2017

戸部健、小学校教科書の記述にみる中国初期の健康観、NIHUエコヘルスプロジェクト・国際ワークショップ「東アジア健康と養生の歴史」、2016

戸部健、近代中国における病気予防意識の多様性 衛生の近代化と個人の養生、静岡大学人文社会科学部・アジア研究センター第一回・国際ワークショップ「アジアの近代化と日本 中国とモンゴルにおける医療・衛生・芸能」、2016

今村直樹、近世近代移行期の手永制と地域社会、「郷と村の国際比較史」研究会、2016

岡村龍男、フェルケール博物館「静岡社関係文書」の史料紹介と国際貿易港指定以前の清水港について、静岡県近代史研究会 2016年度12月例会、2016

今村直樹、近世後期熊本藩の請免制と経済成長、経済史研究会、2015

岡村龍男、茶産地の生産・流通認識と取引慣行、静岡県地域史研究会 2015年度12月例

会、2015

〔図書〕(計 7件)

羽賀祥二、林淳、山田裕輝、浅野麻衣、李主先、高木茂樹、今村直樹、小正展也、真野素行、大山僚介、関口哲矢、吉川弘文館、近代日本の地域と文化、2018、p. 285 (pp. 130-157)

永島剛、市川智生、飯島渉編著 芹澤良子、福士由紀、戸部健、金穎穂、村上咲、法政大学出版局、衛生と近代 ペスト流行にみる東アジアの統治・医療・社会、2017、p. 276 (pp. 159-188)

高島正憲、深尾京司、今村直樹、中林真幸、森口千晶、斎藤修、高槻泰郎、牧原成征、柴本昌彦、萬代悠、鷺崎俊太郎、谷本雅之、宮本又郎、岩波書店、岩波講座 日本経済の歴史 第2巻 近世、2017、p. 306 (pp. 2-22、33-60、216-238、284-300)

村上衛編、陳來幸・吉田建一郎・加藤雄三・田口宏二郎 ほか、京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター、近現代中国における社会経済制度の再編、2016、p. 471 (pp. 83-99)

瀬川昌久、轟莉莉、秦兆雄、小林宏至、長沼さやか、稲澤努、兼城糸絵、川口幸大、風響社、〈宗族〉と中国社会 その変貌と人類学的研究の現在、2016、p. 320 (pp. 173-196)

川口幸大、稲澤努、兼城糸絵、長沼さやか、小林宏至、櫻田涼子、奈倉京子、李華、陳碧、河合洋尚、阿部朋、行路社、僑郷 華僑のふるさとをめぐる表象と実像、2016、p. 314 (pp. 115-139)

長谷川清、曾士才、稲村務、廖国一、松岡正子、長沼さやか、片岡樹、塚田誠之、櫻永真佐夫、孫潔、韓敏、高山陽子、瀬川昌久、野本敬、長谷千代子、風響社、民族文化資源とポリティクス 中国南部地域の分析から、2016、p. 436 (pp. 211-234)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

〔その他〕

ホームページ等：なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

戸部 健 (TOBE, Ken)

静岡大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号： 20515407

(2)研究分担者

今村 直樹 (IMAMURA, Naoki)
熊本大学・永青文庫研究センター・准教授
研究者番号： 50570727

吉田 建一郎 (YOSHIDA, Tateichiro)
大阪経済大学・経済学部・准教授
研究者番号： 60580826

長沼 さやか (NAGANUMA, Sayaka)
静岡大学・人文社会科学部・准教授
研究者番号： 80535568

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

岡村 龍男 (OKAMURA, Tatsuo)
駒澤大学・非常勤講師